

せんげん台と念仏橋

越谷北高等学校長 下山 忍

8月も中旬に入り、夏休みも折り返し点を過ぎました。学校では「快適ハイスクール改修工事」が進む中、部活動に熱心に取り組む1・2年生の元気な声が聞こえます。文化祭準備も着々と進んでいるようです。校舎の改修工事で教室が使用できないため、3年生は越谷市中央市民会館に行っています。ここを講習会場とし、猛暑・酷暑に負けずにひたすら勉強です。その頑張りには、きっと冬に大きな実を結ぶことでしょう。

さて、今回は、校長通信第2号「川のある町」に続き、地名について触れてみたいと思います。本校の最寄りの駅は東武鉄道の「せんげん台」駅で、生徒の約7割がこの駅を利用しています。「せんげん台」とひらがなを使いますが、もし漢字をあてれば「千間台」です。駅周辺に「千間台西」「千間台東」という地名もあります。漢字は意味をもっていますので、どのような漢字をあてるかで地名の由来が推定されます。例えば、もし「浅間台」ならば「浅間神社のある高台」、「千軒台」ならば「千軒の家屋のあった高台」というような由来を持つはずですが、それでは「千間台」の由来は何でしょうか？解答を先に言ってしまうのですが、「千間堀（せんげんぼり）の流れる高台」ということのように、「千間堀」とは新方川（にいがたがわ）の古称です。新方川は、春日部市の増田新田に源を発し、武里団地の南側を通り、本校のある越谷市大泊で会之堀川をあわせ、やがて中川に合流する河川です。江戸時代以来「悪水（あくすい）」すなわち田畑に不必要な水を流すという用途を持っていました。新方川の読み方は「にいがたがわ」です。「しんがたがわ」と呼んでいる人はいませんよね。さて、その古称「千間堀」の「間（けん）」とは長さの単位で、メートル法の約1.8mに当たります。千間=1000間ならば約1.8kmになります。現在の新方川の流長は約11kmですので、これは一致しません。次第に流路を延長していったのかもしれませんが。

そのせんげん台駅から本校への通学路に「念仏橋（ねんぶつばし）」があり、多くの本校生徒が朝夕渡っています。現在では自動車の往復通行も可能な立派な橋ですが、これができたのは平成2年で、それ以前は昭和20年にできた狭い橋だったとのこと。さらにその狭い橋ができる前は丸木橋だったそうですが、この頃の「念仏橋」にまつわる面白い伝承があります。それは、一人一人がやっと通れるような小さな丸木橋だったので、みな落ちないように恐る恐る渡っていたそうです。この橋を渡る安国寺の住職も必ず念仏を唱えていたので、念仏橋という名前がついたとのことでした。安国寺の住職は怖くて念仏を唱えたのではなく、橋から落ちて亡くなった人の霊を慰めるために念仏を

唱えたという解釈もあるのですが、怖くて念仏を唱えたという解釈の方が人間味のある話になると思いました。

その安国寺は今も残っており、桜井小学校の近隣、本校から歩いて5分ほどのところにあります。安国寺というと、足利尊氏・直義兄弟が南北朝内乱での戦死者の霊を慰めるために全国に建立した「安国寺・利生塔（あんこくじ・りしょうとう）」が思い浮かびますが、これとの関係はないようです。しかし、行ってみると、かつて熊谷直実（くまがいなおざね）の草庵があったという伝承を残していました。熊谷直実は、今の熊谷市を拠点とする武士で、源頼朝に従い、源平の争乱（治承・寿永の乱）で手柄を立てました。一ノ谷合戦（いちのたにのかつせん）で平敦盛（たいらのあつもり）を討ち取った話は『平家物語』などを通じて有名です。戦いが終わった後、世の無常を感じ、法然上人のもとで出家して、蓮生坊（れんしょうぼう・れんせいぼう）と名乗りました。現在、安国寺に残る阿弥陀如来立像（越谷市指定文化財）は、熊谷直実が法然上人から譲り受けた仏像とされています。安国寺には他にも3体の円空仏（越谷市指定文化財）も残されています。円空（えんくう）は、江戸時代に各地を遍歴して5000体以上とも言われる多数の荒削りの木彫仏像を制作したことで知られています。学校の近隣にも様々な歴史が残っているものですね。

さて、本校通学路には、念仏橋より通る人は少ないのですが、「廣橋（ひろはし）」もあります。タローズバスの通る橋で、中央部に珍しいモニュメントがあります。越谷市役所の方のお話では、かつては現在のケーズ電機駐車場付近に架かっており、幅が狭く自動車の通行ができない人道橋だったのですが、平成8年にこの場所に建設したとのこと。「広」ではなく「廣」と旧字を用いているところなど何か謂われがありそうなのですが、調べてみてもよく分かりませんでした。もし何か知っている人がいたら教えてください。